

21世紀の日本のかたち（87）

建築について（1）

東京・上野の国立西洋美術館 ル・コルビュジエ設計



戸沼幸市

<（一財）日本開発構想研究所 代表理事>

1. 国立西洋美術館

「ル・コルビュジエ×日本 ——国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に」展（平成27年7月21～11月8日）、文化庁主催が、国立近現代建築資料館で行われております。3人の弟子とは、ル・コルビュジエに直に学んだ、前川國男、坂倉準三、吉阪隆正です。

開催趣旨は「西洋建築の模倣から始まった日本の近現代建築は、モダン・ムーブメントを受容する中で日本独自の発展をとげ、今日に至っている。そのモダン・ムーブメントの受容において、ル・コルビュジエの与えた影響ははかりしれない。本展では3人の活動を中心に検証するとともに、日本におけるル・コルビュジエの唯一の作品である国立西洋美術館に注目し、その建設経緯と建築の魅力を紹介する。」というものです。

東京が初夏に入った7月の午後の一時、私も久々に東京・上野に建つ国立西洋美術館を訪ねました。JR上野駅公園口からも上野の森の木立の間から、緑色の玉石の壁面が少し見えます。近づいて美術館の門からは真正面にピロティに載っている横長のファサードがすっきりと目に入ります。

建設時、昭和34（1959）年から半世紀が経った現在も初々しい感じのままです。幅40m、高

さ11mの四角い箱型の立面の上に、三角のトップライトの屋根が少し見えます。正面のピロティ入口から建物に入ると、この三角のトップライトから入る光の中に天井まで吹き抜けの中央ホールには、ロダンの彫刻群が展示されておりました。

写真1 国立西洋美術館外観
トップライトの三角屋根が見える



撮影：戸沼（2015/07）

写真2 国立西洋美術館の外観



撮影：戸沼（2015/07）

写真3 トップライトの三角屋根 外観



撮影:戸沼 (2015/07)

写真4 中央ホールからの三角のトップライト
見上げ



撮影:戸沼 (2015/07 撮影)

写真5 心柱と中央ホール



撮影:戸沼 (2015/07 撮影)

写真6 ロダンの彫刻のある中央ホール



撮影:戸沼 (2015/07)

2階の展示空間には西洋の中世宗教絵画などが並べられており、近年増築された別館の壁には私の好きなモネの睡蓮の絵が50年前に見たままに掛けられておりました。

私がル・コルビュジェ設計の国立西洋美術館に出遭ったのは早稲田大学建築学科の学生の時でした。この西洋美術館を見て、これが建築—「近代建築」というものかという強い印象を受けたことを今も鮮明に覚えております。

私の父は地方都市（函館）の大工の棟梁で、数寄屋風の和風旅館の請負などをしており、私も小さい時からよくその現場に連れて行かれて、「建築」は身近にありました。父は長男である私を跡取りにするべく、小学校を卒業するや地元の工業学校（道立函館工業学校（5年制））に放り込んでしまいました。

函館は幕末期、横浜、長崎、新潟、神戸とともに日本が鎖国から開国に向かった時の北の開港都市でしたが、明治期、ロシアなどから洋風建築が移入されており、今につづく、函館ハリストス教会、ロシア、アメリカ、イギリス領事館、また高田屋嘉兵衛以来、北洋漁業基地としてレンガ造りの倉庫など、異国情緒を持った建築景観があります。（参考：理事長の部屋 32、地域学 - 函館）

しかし、少年期の私は建築について自覚的に関心を持つことはなくて、昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日、昭和天皇の日本敗戦のラジオ放送を夏の蟬の鳴き声とともに聴いた少年として、日本はこれからどうなるのか、自分はどう生きるべきか、親の期待した道とは別の生き方があるのではないかといった心境になり、工業学校から普通高校 (函館市立東高等学校) に転校してしまいました。

勉強の領域として建築と離れて人文方面、社会や経済について興味を持つようになりました。

少し回り道をした後に、私は早稲田大学の建築学科に入りましたが、「建築」が人文方面と大いに関係があると気付かされたのは、フランスのル・コルビュジエの所に留学して帰国された直後の建築学科助教授の吉阪隆正先生との出会いです。そして戦後日本に建てられた近代建築の典型、国立西洋美術館に出遭ったことでした。

国立西洋美術館には、明治の元勲、松方正義の三男、実業家松方幸次郎 (1865~1950 年) が集めた古典的西洋絵画、彫刻—「松方コレクション」が常設展示されています。このコレクションは戦後フランスにより差し押さえられていましたが、フランス政府は日仏友好のためにこれを展示する美術館建設を条件に日本側に引き渡しました。この美術館をフランスの建築家ル・コルビュジエが設計し、コルビュジエの日本の三人の弟子たちに監理が依頼されて出来たもので、国立西洋美術館は昭和 34 (1959) 年に東京上野公園の一角に竣工しました。

2. ル・コルビュジエのモデュロールと国立西洋美術館

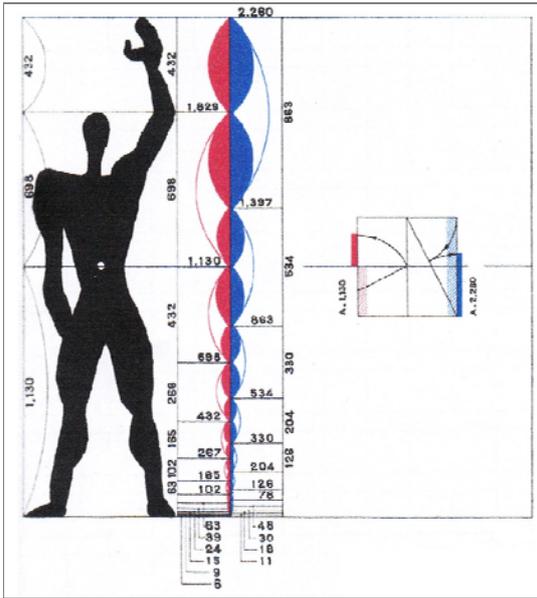
私が早稲田大学建築学科の 3 年生のとき (昭

和 32 年)、学科事務所の掲示板に一枚のアルバイト募集の貼り紙がありました。ル・コルビュジエ設計の西洋美術館が上野に建設されることになり、日本における弟子の一人、吉阪隆正先生が、前川國男、坂倉準三氏と共同でその現場監理にあたることになっており、貼り紙はその助手を求めるものでした。

応募して、まず与えられた仕事は、コルビュジエの事務所から送られてくる寸法書き込みの一切ない図面に寸法を書き入れる作業でした。その時、その作業のために渡されたのが「モデュロール」(ル・コルビュジエ著・吉阪隆正訳) という美術出版刊の 14 センチ四方ぐらいの可愛らしい本でした。その 79 ページに無機的なメートル法を人間の尺度に引きつけた m o d u l o r m o d u l e モデュロール (モジュール・基準寸法+黄金比) section d'or に読み替えた数値一覧表があり、これを手引きに原図の寸法を読みとり、それを日本式の図面に記入する作業を続けたことでした。その本は今も私の手元にあるのですが、そのページだけが手垢で真っ黒になっています。「建築を誤りなく設計するための賢い寸法」「宇宙もまた人間の倍数」といったいわば人間尺度用語もそのときに覚えたことでした。

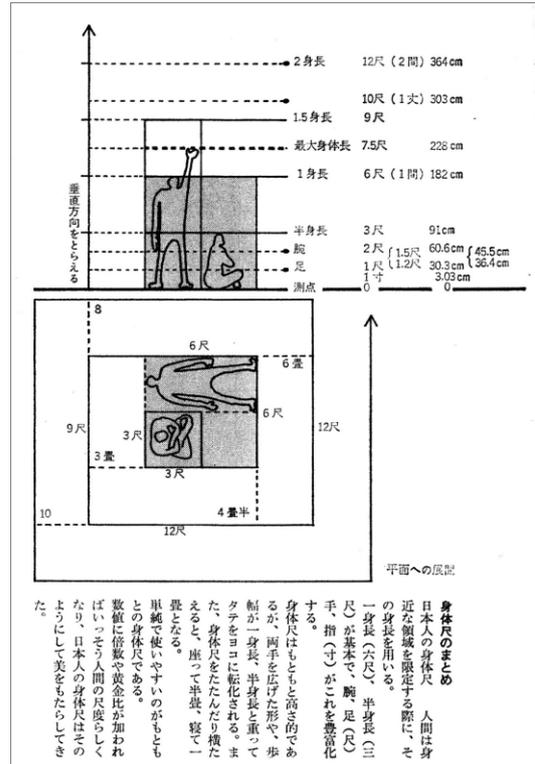
建築を創る物差しを人間について原理的に考察し、人体を基にしているコルビュジエのモデュロールに触発されて、私も改めて、人間尺度について考えるようになりました。コルの基準とした人体は、身長 6 フィート (183cm) であり、日本人は 6 尺 (182cm) と、微妙に異なるのですが、いずれにしる人体尺を基準にしつつ、美的に調和した建築をつくる考え方に興味を覚え、共鳴したことでした。古来日本には規矩術という、優れたいわばモデュロールがあることに改めて気づかされました。

図1 ル・コルビュジェのモデュロール



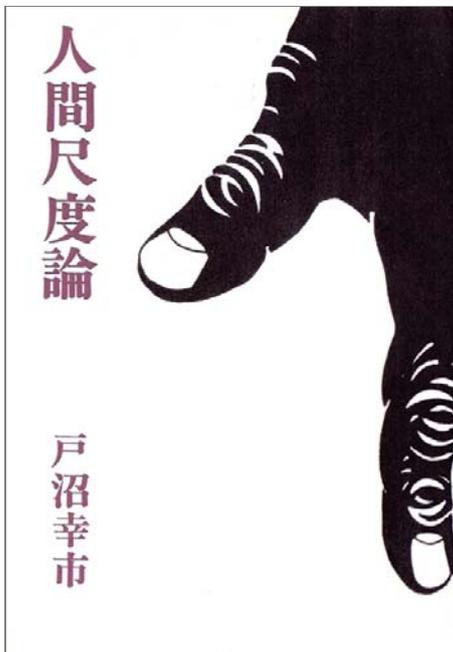
注: 単位 cm
出典 「モデュロール」

図3 身体尺のまとめ



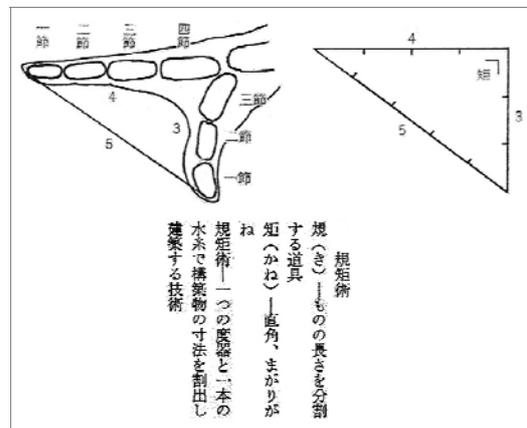
資料: 「人間尺度論」 戸沼幸市 彰国社 (1978/01)

図2 『人間尺度論』 表紙



資料: 「人間尺度論」 戸沼幸市 彰国社 (1978/01)

図4 規矩術



資料: 「人間尺度論」 戸沼幸市 彰国社 (1978/01)

3. コルの建築との出会い

1959年6月、コルビュジェの西洋美術館が竣工した時、吉阪先生にお伴して上野に出掛けましたが、遠くから西洋美術館の空を区切る水平の壁面線の上に突出した三角屋根がまず目に入りました。吉阪先生はその三角屋根を指差して、

あの三角が効いているねといわれて、ほっとしたことを今も覚えております。実はアルバイトでモデュロールを用いて計測した三角屋根の頂点の数値を少し大きく記入したのではないかと気にしていたのです。垂直、水平の建物の寸法計測はまず誤りはないのですが、三角の先端の測り方は、うっかりすると誤差がでてしまうのです。仮に私の測り方がル・コルビュジェ事務所の想定した通りではなくとも大きい方にふれるのは良かったことになるのですから。

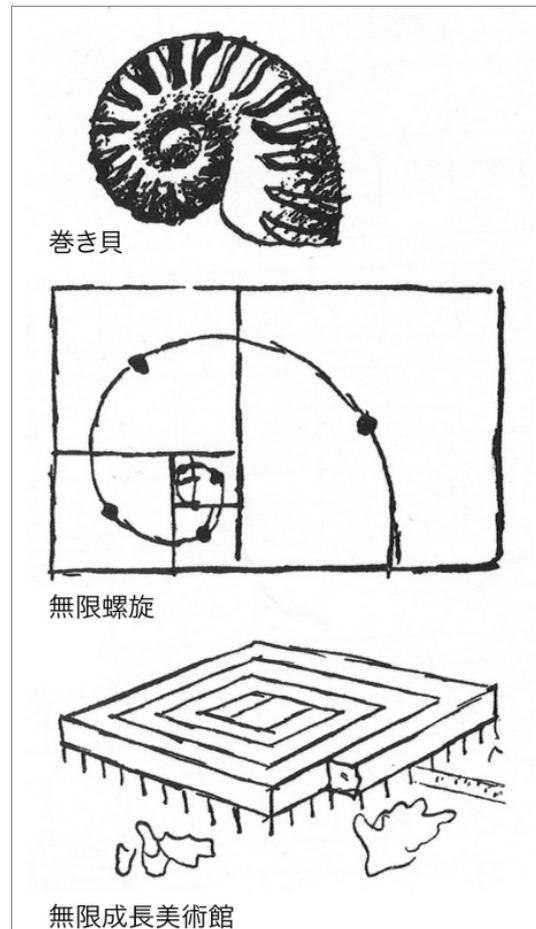
敷地の入口から見える美術館の正面は一階のピロティの柱に支えられた緑がかった壁面であり、端正な印象を与えます。ピロティの柱は梁とともにコンクリート打ち放しですが、型枠が日本の木材（桜）で実に肌理が細かく、和風の肌合いさえ感じさせます。

そしてピロティから内部に入ってまず出会う中央ホール（19世紀ホール）には、建物の全長を貫く広い吹き抜け空間の心柱が垂直にのびて、屋上に突き出た三角形の明かり取り窓にまでつながり、その天空光の下に美術館の全体空間が簡明に理解される仕掛けとなっております。この中央ホールから2階の展示場へと導く折返しのスロープを登ると2階の展示空間に至り、この展示空間は外に向かって螺旋を描きながら展開する四壁に掲げられた古典的な西洋絵画を順に楽しむ仕掛けとなっております。正方形の2階の4面の展示壁に掲げられた絵画は、それぞれ4本の棒状の明かり窓から入る天空光によって、人工照明を補助にして、柔らかく照らされております。

上野に建つル・コルビュジェ設計の西洋美術館は渦巻貝から発想された無限美術館の着想の一つが実現されたものといわれておりますが、「モデュロール」にしる、建築家として時代に向き

合い長い時間かけて追求してきた建築の原理、建築の本質を突き詰めて実現してゆく、ル・コルビュジェの執念深さ、強靱な精神の持続を感じます。

図5 巻き貝・無限螺旋・無限成長美術館



資料: 『ル・コルビュジェ全作品集』Vol. 7)

ユニテ・ダビタシオン（住居単位・集合住宅）

私自身、ル・コルビュジェの実作に接したのは上野の国立西洋美術館の他は、フランス・マルセイユに建つ集合住宅、ユニテ・ダビタシオンと、インド・パンジャブ州の州都、チャンディガールです。

私は昭和41（1966）年春に早稲田大学建築学科に助手として採用されましたが、次の年の夏、初めて西欧・ヨーロッパに旅行する機会を得ました。横浜から船旅でナホトカへ、そこからシ

ベリア横断鉄道で、モスクワ、東欧、西欧と2ヶ月程の西方への旅でした。

この夏、チェコのプラハで行われた AIU (国際建築家会議) に出席の後、ギリシャはコルビュジェが若い時にヨーロッパ建築の原器であるとしたアクロポリスの丘に立つパルテノンの在るアテネに寄りました。この時、パルテノンの見えるリカベトスの丘に在る、C.A. ドクシアデスの主催する WSE (World Society for Ekistics (人間居住に関する世界会議)) の事務局に立ち寄り、コルビュジェが中心になった CIAM (国際近代建築会議) の設立に係わった、ジャッキー・ティルウイト女史 (元ハーバード大学都市計画教授、雑誌 EKISTICS の編集長) に面会することが出来ました。その時、彼女は私の持参した論文「Network City of JAPAN」に興味をもってくれ、これをその年のエキスティックジャーナルに載せてくれました。

アテネからフランス・パリへと旅を続けましたが、当時のヨーロッパ建築の印象は、前々から写真で見ていたせい、異国のものという印象よりも、かつて見たことがあるなといったものでした。フランスではパリの後、マルセイユのユニテ・ダビタシオンを見学しました。

ユニテ・ダビタシオン、住まいの社会的単位を一つの建築にすることに力を注いだコルビュジェの野心的プロポーザルとして知られておりましたが、実物は造形的に迫力をもって力強く私にも迫ってきました。私の訪ねた日にも同様の青年達が3人、5人とコルの精神にふれようと盛んに写真を撮っておりました。建物の荒々しいコンクリート打放しのピロティには例のモデュロール「226、183、113」の人体寸法が打ち込まれており、これにたわむれて、子供達が遊んでおりました。

幸いなことに吉阪先生の紹介状もあり、ここに住んでいた一人の青年が私に声をかけてくれ、商店の通り、幼稚園、詩情を感じさせる屋上、そしてメザニン式の住居を見せてくれました。彼は両親とここに住んでいるとか、将来自分は建築家になるのだと、彼の語るコルビュジェ論は熱っぽいものでした。

どこの国でも住居は人間の生活のための基本的単位空間です。第二次大戦後、ヨーロッパでも日本でも戦災復興は住宅づくりから始まりましたが、人間が集まって住む都市において、垂直に住む共同住宅のつくり方は大きな課題だったわけです。

チャンディガール (インド・パンジャブ州の州都)

平成 22 (2010) 年秋、私はインド (ボンベイ) で開催された世界居住学会に参加の機会に、コルビュジェが 1950 年、当時のインドのネール首相に依頼されて設計したチャンディガールを訪問しました。

チャンディガールはヒマラヤの麓にあるパンジャブ州の州都です。コルビュジェはチャンディガール全体の都市計画、市街地のブロック、地区計画に合わせて、キャピタル議事堂、州政府庁舎、高等裁判所の建築を設計しております。私はキャピタルを見学したのですが、ほんの一日でしたので、論評することなどは出来ないのですが、このキャピタルの荒々しいコンクリート打放しの建築群には、インド人の地を這うような生活を受け止めて、インドの強烈な気候風土に立ち向かうコルビュジェの造形への意志のぎりぎりの姿勢を感じたことでした。

「私はパンジャブ州の首都をヒマラヤ山麓の畑の中に全く新しい姿で構想した。貧亡の中、予算の貧弱の中で。」とは、コルビュジェの残

した言葉です。

キャピタルの建築設計も当然、人体に発するモデュロールに従っているのですが、「開いた手」をキャピタルのシンボルに据えたのは、いかにもコルビュジェならではの着想でした。キャピタルの中心に池を造り、ヒマラヤの山並を背景に16mの高さに風で動く「開いた手」をしばし見上げたことでした。東洋においては「仏陀の手」など、手は空間を焦点化するシンボリックなものなのです。

図6 ル・コルビュジェ「開いた手」



資料:1954 ル・コルビュジェ財団発行絵はがきより

コルビュジェは1887年、日本式に言えば明治20年生まれですが、まずヨーロッパにおいて進行していたグローバル化する産業革命(第1次)に併走するように、人間居住に係る諸問題に、人口増や都市問題、機械文明の在り方等に先進的に取り組み、近代建築・都市像を追求しました。

コルビュジェ(1887~1965年)は建築・都市計画家としてその実作と多くの著作において第二次世界大戦、戦前・戦後を通して世界のこの方面の多くの人達に強い影響を与えてきました。

今、文化庁国立近代建築資料館で開催されている「ル・コルビュジェ×日本 - 国立西洋美術館を建てた3人の弟子たち」展は、改めて日本

の近代建築 - 日本のかたちへの影響を考えるよい機会です。

ル・コルビュジェの建築は3大陸6ヶ国に及んでおりますが、国立西洋美術館を含め、ユネスコの世界遺産指定の運動が起きています。

【参考文献】

- ・『ル・コルビュジェと私』吉阪隆正集8 勁草書房 1984.2
- ・『ル・コルビュジェ 建築とアート その創造の軌跡』MORI ART MUSEUM・森美術館 2007.5
- ・『ル・コルビュジェ全作品集 Le Corbusier』吉阪隆正 全訳、ウィリ・ボジガー 編、二川幸夫 発行 Vol.5・1978.2 Vol.7・1977.9
- ・『新建築』1959.7 国立西洋美術館
- ・『ル・コルビュジェと国立西洋美術館 開館50周年記念』国立西洋美術館・(財)西洋美術振興財団 発行、2009.6
- ・『モデュロール I』ル・コルビュジェ著、吉阪隆正訳、美術出版、1953.6
- ・『人間尺度論』戸沼幸市著、彰国社、1978.6
- ・『ル・コルビュジェのインド』北田英治 写真、彰国社 編、2005.6

(2015.07.25)